

4、上原 亀太郎
5、池田 竜夫

第三節 東鹿越簡易郵便局

石灰石鋳業の發展によつて人口の増加の一途をたどつていた東鹿越に通信の施設がなく、幾寅集配局までは約六キロ、鹿越集配局までは約三キロ離れているので、住民の不便は非常に大きかつた。

しかし普通郵便局の設置条件はまだ不備なので、こまつていたところ昭和二十四年七月簡易郵便法が施行されたので、雜貨商坪井繁二が郷土の要望にこたえるために申請したところ昭和二十五年八月一日設置認可となつたのである。

商店併置の十坪で郵便物の受付、為替の受払、貯金の受払、振替貯金、保険の申込等をうけている。

第四節 鹿越郵便局

鹿越の通信事務は先ず駅通からであるが、これが廃止されてから郵便局が出来るまで、幾寅局区内であつたのである。

ところが幾寅は初め落合局区内なので本村は通信の上

から見ると天狗の鼻から上流地方は落合から、またこれから下流は金山から發達したのである。

昭和の初期の頃渡辺正之助の息子が学生として幾寅の高等科に通つていた頃、幾寅の局から郵便物を受取り、鹿越に持つて歸つて配達していたことも知られている。

駅前の入舟商店でポストを引受け切手を売つたが、この店を引ついだ高橋一夫が初代局長になるのである。鹿越小学校の沿革によると高橋の父が教師と郵便取扱を兼ねたことが記載されている。

しかしこれは正規のものでなかつたためか、鹿越の局歴には残つていない。

さてこれから後のことは鹿越局にのこつてゐる書類によつて書くと、石狩国空知郡南富良野村字鹿越千百九十一番地に鹿越郵便取扱所が出来て、為替、貯金、電信、電話、郵便、小包の取扱を初めたのは昭和十五年十月十一日（開局）となつてゐる。

昭和十五年十二月一日無集配三等郵便局鹿越郵便局となつて、各種才入金、保険金、年金の取扱を始めてゐる。

その後無集配特定局となつたが（年月不明）敗戦の昭和二十年の十一月一日、物資不足の最中に宇鹿越千百六

十六番地に局舎を新築して移転した。

電話回線を見ると昭和十五年十月十一日金山―落合線（金山、幾寅、落合、鹿越）同十六年富良野―落合間（富良野、鹿越、幾寅、落合、金山）同二十七年富良野―幾寅間が完成した。

歴代局長は次の通りである。

1、高橋 一夫

2、西沢 義郎

3、水島 達雄

高橋一夫と西沢義郎の間に局長心得として目下順治がわずかの期間はいっている。二代局長は二十五才で局長になつたので当時評判であつた。満で計算すると二十三才だつた。

第五節 金山郵便局

明治四十年三月三十一日、金山市街地十三番地に初めて金山郵便局が三級局として設けられ、郵便の集配と為替貯金、の事務の取扱をしたのである。

明治四十五年四月二十六日、市街地三十二番地に新築移転した。

次に大正十二年十二月二十二日基線七号に新築移転し

同十五年一月一日から公衆電話並びに電話事務を開始したのである。

昭和四年十二月二十六日、右左府線開通によつて公衆電話中継を開始、同九年十二月二十一日、現在地に新築移転したのである。

歴代局長は次の通りであつた。

1、武田 孝一

2、下田 亀藏

3、川島 房吉

4、岡本 初太郎

5、井上 尚光

6、鈴木 徳吾

7、渡辺 信

初代局長は文久三年二月三日生れで金山駅通取扱人であつた。

駅通と言へば通送人のことを思い出すか、金山―占冠間の通送は今日まだなくなつたわけではない。

1、窪田 松太郎

2、梅村 勇太郎

3、佐藤 豊作

4、増田 末造

大正 十年 二月二十八日
大正十二年十一月廿五日
昭和 六年 五月三十一日
昭和 七年十二月 一日